1

冒頭の文章の出典はシュペングラー(1977)pp.80 - 81 である。表記は原文に従ったが、下線は問題作成に当たって施している。

問 1. ア

当時のペニー貨の銀の含有率はほぼ 97%。当時としては高い水準であった。他選択肢は全て正文。

問 2. ロングシップ

他、ラングスキプとも。クノール船やスケイプ船とも呼ばれることがあるが、時代等限定的なためロングシップを採用している。

問 3. エ

フランクフルト・アム・マインは国際空港のあるフランクフルトである。マイン河畔に位置。地理的にも、バルト海から離れており、ハンザ同盟には加入していない。ハンザ同盟に加わっていたのはフランクフルト・アン・デア・オーデルというオーデル河畔の似た名前の都市。ほか三つは全て帝国自由都市であり、かつ、ハンザ同盟に加入している。

問 4.『西洋の没落』

シュペングラー著。

問 5. 引用文の出典は高山(2007)p.61 より。下線は問題作成に当たって施した。

A、『乳と蜜の流れる』土地

カナンのこと。出典は旧約聖書の『申命記』より。要するに肥沃な土地という意味である。

B、フリードリヒ二世

シチリア王でもある。(その場合フェデリーコ二世と表記することも。)

ホーエンシュタウフェン朝第三代皇帝。“玉座上最初の近代人”とも。

教皇から二度破門されている。

C、エンリコ・ダンドロ

ヴェネツィア共和国第 41 代ドージェ。(在位 1192－1205)

参考文献

シュペングラー著、村松正俊訳(1977)『西洋の没落 第二巻 (改訂版)』五月書房.

アンリ・ピレンヌ著、増田四郎ほか共訳(1956)『中世ヨーロッパ経済史』一条書店.

レジス･ボワイエ著、持田智子訳(2001)『ヴァイキングの暮らしと文化』白水社.
高山博(2007)『ヨーロッパとイスラーム世界』山川出版社.
山内進(2011)『北の十字軍』講談社.
内川勇太、菊池雄太(2017)『中世貨幣の世界：銭貨，銭貨製造地，銭貨製造人』.

2

問1.　A　エ　B　カ　C　コ　D　ス

4人の略歴は、全て杉山(2012)の巻末付録から引用した。4者とも軍閥時代の重要人物であるから、説明は不要であろう。

問2.　イ

ア。唐継堯と李烈鈞の名が入れ替わっているので誤文。ウ。広西の独立宣言は貴州の後。陸栄廷は、独立した雲南・貴州を鎮圧するため広西省を通過していた広東軍を武装解除し、独立を宣言した。こうして一気に広西と広東を手中に収めた陸栄廷は、以後大きな役割を果たすこととなる。エ。康有為ではなく梁啓超。戊戌変法ではともに変法派として連携した両者であるが、辛亥革命の頃には立場の違いが明確化し、別々の道を辿るようになる。よって正文はイのみ。

問3.　ウ

「皖」とは安徽省のこと。すなわち、皖系とは安徽派を指す。同様に、直系は直隷派、晋系は山西派を指す。馮系は西北派のことで、首領の馮玉祥にちなむ。

問4. イ・ウ

「五省」とは江蘇・浙江・安徽・江西・福建のこと。この頃、河南では馮玉祥が、湖北では逃れてきた呉佩孚が主な勢力であった。

問5. ク

施從濱は山東の人物。奉天派に協力し孫伝芳と戦ったが、敗北し惨殺された。

問6. 河北

現在の河北省唐山市に位置する。

問7. 軍人　サ　思想家　オ

いわゆる、「張勲復辟」という事件である。

参考文献

杉山祐之(2012)『覇王と革命：中国軍閥史 1915-28』白水社.

3

冒頭の文章の出典は、倉野憲司校注(2007)『古事記』pp.228-229. である。表記は原文に従ったが、下線は問題作成にあたって施している。

問 1. ふることぶみ

本居(1940) p.40.

「布琉許登夫美とぞ訓(ヨマ)まし」

問 2.

A、26

下線部①の人物は、神武天皇から数えて 26 代目にあたる。

B、ウ

倉野(2007)p.228.

「袁本杼命(をほどの)を近淡海(つのの)國より上り坐さしめて」

C、エ

アは淡海三船による漢風諡号、イとウは『日本書記』における名前、エは『古事記』における応神天皇の名前である。

問 3. 天國押波流岐廣庭命

欽明天皇のことである。

問 4. ア

坂本・家永・井上・大野(2003)pp.188-190.

「筑紫国(つくしのくにのみやつこ) 造(いは) 磐井(ゐ)」

問 5. 水野祐

水野は、1952 年の著書『日本古代王朝史論序説』のなかで、崇神天皇・仁徳天皇・継体天皇を初代とする 3 王朝の興廃があったと主張した。

＜参考文献＞

倉野憲司校注(2007)『古事記』岩波書店

坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注(2003)『日本書記(三)』岩波書店

本居宣長撰、倉野憲司校訂(1940)『古事記伝(一)』

水野祐(1952)『日本古代王朝史論序説』

4

問 1. 蓑田胸喜

蓑田は、1932 年から 1941 年まで国士舘専門学校に勤めていた。また、慶應義塾大学に勤めていた 1927 年、原理日本社を設立し、その主宰となっている。

問 2. ア

アは 1915 年 11 月 10 日、イは 1912 年 4 月 10 日、エは 1912 年 4 月 14 日の出来事である。なお、ウに言及されている 1912 年のストックホルムオリンピックに、金栗は陸上競技の選手として出場している。

問 3. イ

アは織田萬、イは原田熊雄、ウは小野塚喜平次、エは田中館愛橘である。なお、松本の証言は、宮沢(1970) pp. 579-580.

「松本　小野塚君に織田(萬)に……。

(中略)

それから田中館(愛橘)さんがやっぱりたたいた。」

問 4. 林銑十郎

林は、1934 年 7 月 8 日から 1935 年 9 月 5 日まで、陸軍大臣を務めている。

問 5. ア・イ

発禁処分を受けたのは、『憲法撮要』『逐条憲法精義』「日本憲法の基本主義」の 3 冊である。

問 6. イ

岡田内閣の与党は、立憲民政党・昭和会・国民同盟である。

問 7. 政治論略

『政治論略』は、エドマンド・バークの『フランス革命の省察』『新ホイッグ党員から旧ホイッグ党員への訴え』を抄訳してまとめた著作である。

＜参考文献＞

ボルク著、金子堅太郎訳(1881)『政治論略』元老院

宮沢俊義(1970)『天皇機関説事件：史料は語る．下』有斐閣